



やまばと「ミニミニ」での 幾つかの出来事

(一)

法人では、「中長期計画」の骨格が出来上がり、今後は、「経営」「支援」「人材」「研修」「建物・環境」「地域」の六つの視点から、ワーキンググループのメンバーたちが具体的な計画を立案していくことになっていきます。

今回の機関紙六月号に、この計画の内容をお知らせする予定ですが、この号には各事業所のビッグニュースも掲載するので、中長期計画のための紙面はあるのかなど、今のところ不明確な面が多いです。

ところで中長期計画作成の参考にするため、職員たちにアンケートをとったのですが、正反対の意見も含めて、多様な意見が混在することを改めて認識しました。例

発行
社会福祉法人 牧ノ原やまばと学園
〒421-0412 静岡県 牧之原市
坂部 2151 番地 2
TEL:0548-29-0221 FAX:0548-29-0157
E-mail:honbu@yamabatogakuen.jp
<http://www.yamabatogakuen.jp/>

機関誌代は無料です。

えば、アンケートを定期的にとつてほしいという意見もあれば、その反対もあるというわけです。私たちは、その両方に共通した基本的な願い、(要望を聞くだけでなく 応答・実行してほしい)を見つけて出して、責任を果たしていく必要がありそうですし、多様な意見の中から、やまばとの今後の歩みにとってベストな計画は何か、よく検討



し、選択していく必要もあります。職員から寄せられた意見の中で、「未来も良いけれども、現在こそ大切だと思う。『今』このとき最善を尽くすことが、次の良い歩みにつながると思う」という意見が多くあり、私も全く同感なので、こういう姿勢の人が多いことを心強く思ったのでした。私たちの主要目的の一つは、社会で弱い立場におかれた人たちの尊厳を守り、彼らと共に笑顔で歩むことなので、その目標を忘れず、激変する社会の中で、今後の歩みにふさわしい中長期計画を立て、必要に応じて修正していきたいと願うことです。

(二)

五類に移行した新型コロナですが、本年一月中旬から三月上旬にかけて、こちらの五つの施設で、クラスター(感染者五名以上)が発生しました。また、クラスターには至らなかつたものの、ほぼ全ての施設で、ポツポツと少数の人がコロナに感染していきました。かつてと違って、「コ

ロナ感染」イコール「死」を意識することは無くなり、そのためクラスターが発生しても、かつてほどは緊張せず対応できたのは幸いです。

ワクチンの有効性については、「オミクロン株流行下では、感染予防・発症予防効果の持続期間等は、二〜三ヶ月程度。一方、重症化予防効果は一年以上一定程度持続する」と言われていますが、当法人の施設関係者の多くは、新型コロナウイルスを、最大七回ほど接種しており、ほぼその通りの状況になったとも言えます。

実は私も、身体がとんでもなく抗原検査キットで判定してもらったところ、「陽性」と判明。二月十四日から約二週間、自宅療養しました。症状は人によって違うようですが、私の場合は、熱なし、嗅覚・味覚の異常もなし、喉の痛みもあまりなく、ただ身体中がひどくだるくて、食欲は皆無でした。

この期間中に「管理者面談」が予定されていたため、Zoomで対応しましたが、いつもと違って力がなく、早く終わりますよう休めますようお願い続けたのでした。

完治までに意外に時間がかかったのは、私は二回しかワクチン接種せず、重症化予防効果の期間が過ぎていた?のかもしれませんが。

(三)

ワクチンについては、副作用のリスクを伝え警告を鳴らす医師もいれば、逆に、ドイツのエアランゲン大学病院微生物学研究所(キリアン・ショーバー博士)は、桁違いに多い回数の新型コロナワクチンを接種した男性(62歳/公的な記録では、九カ月間に八種類のコロナワクチンを134回接種。本人の主張によると、二十九カ月間に計217回ワクチンを接種)について、血液と唾液の検査をしたところ、彼の免疫系は疲弊するどころか正常に機能していた、又、新型コロナウイルスに対する免疫力も、通常回数のワクチン接種者より優れていたと分かったと発表しました。

まだまだ説明されるべきことが多いのですが、やはり、ワクチン接種は、大多数の人にとって感染予防、発症予防、重症化予防の面で有効に必要な方法だと言えるでしょう。その一方で、副作用のリスクや被害を被る人もありう

るので、各自が適切な選択をできるような支援されるべきでしょう。

当施設のご利用者に対しては今後もワクチン接種を行うことになりそうですが、私自身については、(二月中旬にコロナに感染したもので、五月位までは感染予防・発症予防効果はあるだろう、また、一年余は重症化予防効果が続くだろうなどと推測し)、この一年間は、未接種でいようと思っています。

(四)

法人本部は、やまばと希望寮や生活支援センター、そして療養所と同じ建物内にありますが、先日、診療所入り口付近で、看護師の村さんと立ち話しをしていると、ご利用者のAさんが目にも止まらないスピードで中に入ってきて、二人の前を通り過ぎ、やや高い棚の上に手を伸ばし、棚上の広告用紙を掴んで去っていききました。

「Aさん、こんにちは」と言っても返事もありません。中村さんによると、棚の上から広告用紙を収集することが、彼女の日課とのこと。そのため診療所のスタッフは、毎日、広告用紙を棚の上に備えているのだそうです。

Aさんは「ありがとう」とも言いませんでしたが、自分の任務を果たすと大満足なのだそうです。

「それにしてもAさんは、私たちのほうを見向きもしなかったわね」「そうなんですよ。たぶん、私たちのことは、木か、石柱くらいしか思っていないのでしょう」

「ああ、私たちは木か、石かあ」「そう言って大笑いしたのでしたが、重い障害を持つ人々の支援員たちは、木や石として見られていることを楽しむべきで、木や石が動き出し、ご利用者の前に立ちはだかつて命令したり指導したりし始めると、とんでもない結末につながるのではとも気づいたのでした。

そういえば、Aさんは、かつては大声で、「ダメダメ、そこに入っちゃダメ」とよく独り言を言っていました。最近は全く耳にしません。たぶん、近年はAさんにそのようなことを言う人がいなくなり、Aさんの脳裏から、あの禁止言葉が消えたためでしょう。

(四)

Dさんは長い間、毎日一回位は、大声で悲痛な叫び声をあげる人でした。「ギャー」とか「イヤー」と

かいう叫び声を聞くと、彼女の苦しみはどう対応してよいか分からず、こちらは無力感に襲われるばかりでしたが、そのDさんが、最近はずつ変わり始めているようで、関係者としてはうれしく思っています。振り返ってみると、おびただしい数のスタッフがDさんと関わり、(非の打ちどころのない支援だったとはとても言えませんが)、めいめいが精一杯、接してきたのでした。彼女が叫ぼうが叫ぶまいが、態度を変えず、平静に暖かく寄り添い続けてきました。

そして、この方の背後には、いつもご家族の愛情、中でもお母さんの愛情が、注がれていました。

そのようなことが積み重なって、あたかも地中で長く眠っていた花の種が、温かい春の日差しにより芽を出し始めるように、神様は、Dさんを徐々に光に向けてくださっているのでしょう。感謝です。

〈理事長〉長沢道子



キャリアコンサルタントとして 子供たちとこの町の未来のためにできること

松 下 純 子

令和六年二月に「高校生の君へ」自分の好きと得意の見つけかた」なる高校生のキャリア支援冊子を制作し、発刊しました。その中のキャリアインタビューコーナーで、理事長様にご寄稿を頂いたご縁で、今回このような機会を頂き感謝しております。

私が人材採用や社員教育の仕事で

独立をしてから10年以上が経ちます。

会社員時代は、人事として日本全国を走り回って薬剤師採用活動をしていました。目線は自社と全国・業界というところでしたが、独立してみると自分の仕事や学びを通して地域と向き合うことが一気には増えました。

会社員時代は、医療・薬を通して観ていた世界の見え方が大きく変わり、あらゆる業界の様々な経営者、働く方々と相對することが増え、視界がさらに広がりました。と、同時に「人不足」という言葉の深刻さの違いと、少子高齢化が自分の認識をはるかに超えた状態となっていることに驚愕しました。これまでも見聞きしていた厳しい状況と未来予測は、どこか

で起きていることではなく、我が町が抱える直近の重要課題そのものでした。住む人が減り、生まれてくる子供が減り続けている現在の流れのまま進めば、10年後どころか5年後のこの町はどうなるのだろうか？と背筋が冷たくなる程の危機感を抱きました。

その頃から、牧之原市中小企業小規模企業振興円卓会議へのお声かけや、地元高校で静岡県学校運営協議会委員、学校改革プロジェクト等々にも複数関わらせていただく機会を頂き、行政を始め多くの方が厳しい現状に取り組んでくださっている中、キャリアコンサルタントという「人材採用」や「人材育成・組織造り」の専門家であるはずの自分も、何か大切なふるさとのため、ひいては日本未来の為、何かしなくてはという思いが強くなりました。

人が居ない、人が採れない」と言っている企業が多くある一方で、働きたくても働けない状況に陥ったまま戻れなくなる若者がいます。そう

いった若者の中には、人と関わるのが元々苦手だった子達もいれば、発達障害等何らかの障害を持つ方もいました。また、何の問題も無く高校、大学と進んで就職した後、ちょっとした人間関係の問題から鬱症状や自閉的な状態になったまま抜け出せない方もいました。我慢が無いとか、気が弱い、という言葉で片付けるのは簡単ですが、寄り添って支援をしていくと、そもそも彼らは、本当に自分のしたい事、得意なことを選んでいたのだろうか？と感じることも複数ありました。成績が優秀で素直（親の言うことを良くきく）な子

程、親や周囲の価値観で生きてしまっている、大学も就職も傾向がありまです。そのままうまく進むことも多いでしょうが、ちよつとした躓きで転んだ時に立ち上がることが大変な傾向が高いと感じます。ここ20年仕事を通して観てきた若者の多くは、とても繊細で他者との直接的な感情のやり取りを苦手とする傾向が強く見えます。人と違うことをしたくない、人と言ひ合いをしたくない、そんな思いが重なって自分の心の声に耳を塞いで過ごしていれば、体を壊す人が出て不思議ではないでしょう。

他者と違って良い、人は皆違って当たり前なんだよ、そう言ってあげたいという想いを強く抱くようになりました。親が勧めるから、世の中で人気だから、ではなく、自分自身が興味を持つこと、やっていて楽しいことを知った上で選択して欲しい。できるなら、中学、高校という心身が柔軟な時に自分の可能性をたくさん探って欲しい、そんな想いを冊子に込めました。それと同時に、ただでさえ少なくなっていく地元の子供達・若者が学業を修めた後に、外にばかり目を向けるのではなく、自分を育んでくれたこの町に残るとい

う選択肢や、戻ってこの町を支える人材になりたいと思えるように、地域を支える産業と地元経営者との繋がりを早期から作っていったらと考え、高校生に向けた幾つかのキャリア事業を提案し実行しています。ジョブシャドウイングや、インターンシップ、社会人との対話という機会の積み重ねを通して、これまでは、ほぼ無かった地元企業との繋がりは濃くなっており、進路選択として地元目を開ける生徒も出ていますので、今後も活動を継続していききたいと考えております。

10年分のありがとう

「事業終了・事業引継ぎの過程を通して感じたこと」

ぎんもくせい

阿部 順子

当法人が島田市から委託されていた島田市立養護老人ホームぎんもくせいの運営を、令和六年三月末をもって次の指定管理者に引き継ぐことになりました。措置制度が残る養護老人ホームで、「介護」以外の困りごとがある方々と向き合い、ともに歩んだ二期10年でした。事業終了となる過程や引継ぎの中で、私を感じたことをお伝えできればと思います。

率直に感じたことは、事業を経営していくには同じことをしていてもダメということ。いずれ社会のなかで淘汰されていくという危



機感です。生き残っていくためには、①社会の動き(情報)に敏感でいること、②地域や社会が必要としているニーズに応えた新しいサービスを創造し提供し続けること(挑戦すること)、③戦略的な経営方針があること、ではないかと私は感じました。

それは社会福祉法人に置き換えても同じではないでしょうか。「やまばと学園」には、強い組織力(組織体制)のもと、地域や社会のニーズに応え、新しいサービスを創造・提供し続ける法人であって欲しいと私は願っています。折しも法人では未来検討会が設置され目指すべき姿を検討しています。個人的には「ワクワク・ドキドキ・ハラハラ」する魅力ある法人になることを期待しています。

最後になりましたが、島田市立養護老人ホームぎんもくせいの運営を支えて下さった多くの方々や関係者の皆さまに心から感謝申し上げます。そして、私のぎんもくせいでの宝物は、一緒に働いた仲間の人一人だと自負しています。

(施設長)

利用者さんの手芸作品

ぶどうの木 鈴木ひろみ

最初に96歳の女性のことをお伝えします。ぶどうの木の利用を始めて6年になります。手先が器用で紙を折って、立体的な作品をお作りになります。感心させられるのは、作品が難しければ一層意欲が湧いてくるらしいことです。

七、八年前に近所の方に教えてもらい作り始めたようです。折る紙のサイズは小さいのは7×4センチ。大きいのは10×6センチ。1つの作品に使う数は1000枚くらい。土台となる1周りが30枚。「土台が大切」と話されます。



10段目で加減をして行き、膨らめ方で丸くなったり、細くなったりして型を決めます。

色の構成、配置等、常に出来上がりを意識してボンドでとめていく。早くても一週間ほどかかり、とても

時間と根気のいる作業です。頭を使っての作業に感服しています。どの作品も色合いがいいのです。今は、お雛様とチューリップに取り組んでいます。

2人目は92歳の女性です。荷紐を使って、ストラップから小物入れ、季節の飾り物に至るまで、カラフルな色を組み合わせて作ります。とにかくきっちり力を込めて編み上げます。施設内に飾ったリースは、ぶどうの木の看板となっています。バラの花、亀のストラップ等、頂いた皆さんは大喜びです。

お二人とも、作品を見るとまるでプロと言っても過言ではありません。仕上げがきれい。年齢を重ねて熟練に磨きがかかり、頭が下がる思いです。他にも、お習字、折り紙、布製品、塗り絵など多彩な作品を持ってきて下さいます。

ぶどうの木にお越しの際は、ぜひ皆さんの作品を見て下さい。(新作に出会えるかも・・・)

(施設長)



育児休業を取得してみて

やまばと希望寮 久保田 雅紀

現在育児休業中ですが、「育児休業」という言葉が、まさか自分にはあてはまるとは夢にも思いませんでした。それが、今の率直な感想です。一般に男性が取得するのは、どこか抵抗感が何となくありますが、ひとつの権利ですので、色々と思案してみても申請することにしました。

実際に育児をしてみると、ただただ時間に追われたり、必要な知識の学習や習得となり、毎日変化の連続のような気がしました。悲壮感や孤独感、悩みももちろんありますが、周囲の手厚い支えもあり、何とか形になってきました。昔は、大家族が当たり前でそれ相應の人数が育児をフォローしてくれたり、「男は仕事」「女性は家事」と

いった認識があったと思います。今は、核家族やワンオペという状況が

生まれつつあり、育児への負担感がどうしても増えています。経験した方は知ってらっしゃると思いますが、「やること」「決めること」がやまほどあります。ひとりで全てを抱えることはとても困難な状況で、家族や職場、医療、保健センターの方々のサポートは育児を始めてから大変に助かっており、ありがたく思いました。感謝しています。

また、育児についての知識はもちろんですが、社会制度も事前に学習するほうが良いと思いました。思うことはたくさんありますが、「とにかく楽しんでやる」というフレーズにすべてを込めて、これからも進んでいきたいと思っています。

(生活支援員)

ウエルビーさんの食事と花もも

ケアセンター花もも 大須賀 千佐美



ケアセンター花ももの自慢の1つに「温かい食事」があります。これは、こちらに移動する前から「皆さんの(株)ウエルビーフードシステム(ウエルビーさん)が配慮してくださっていることです。」

ご利用者にとって「食べること」は1番の楽しみ。温かいものは温かく、冷たいものは冷たく、美味しい状態でいただくことができるのは、人間にとっても大切なことだと思います。

場所の移転にあたり、食事をお弁当業者に頼もうかという案もありましたが、みんなで話し合い、ウエルビーさんの食事がいいねということになりました。栄養士さんが栄養バランスを考え色々なメニューや希望を取り入れてくれること、作っている方の顔が分かることが魅力でした。先日、保護者会で希望する保護者の方にお食事を召し上がっていた

きました。「おいしいねえ」「こんなに生野菜を食べられるんだね」という感想を頂き、保護者にとっても安心なのだ実感しました。

ウエルビーさんの良さは食事だけではなくありません。何より愛情を頂いていると思っています。移転前は、同じ建物内に調理室があったこともあり、毎日ご利用者が調理室に立ち寄り「おはよう。今日のご飯、なあに」「今日は〇〇だよ」「明日のご飯、なあに」「また明日ね」「風邪引かないでね」といったやりとりがあり、ほっこりするものでした。今は、施設が新築移転したため、皆さんと会える機会が減り淋しいですが、行事や節目の時には心のこもった食事やスイーツを作って下さっています。そんな温かい心遣いに感謝です。これからも食事の喜びをご利用者と共に感じていきたいです。

(生活支援員)



